



男の手料理

大和証券グループ本社
執行役社長

中田 誠司

料理を始めたのは、大学生のころ。一人暮らしではなかったが、不良学生故に、家族とは食事の時間が合わず、自分で勝手にパスタなどを作り始めたのがきっかけ。男子厨房に入るべからずで育った昭和一桁の父は不満気になっていた。結婚してから、また料理を始め、妻より自分の方が上手いとう奢りもあり、ラーメンやカレーを作る時も、見よう見まねで、スープの仕込みを朝からやっていた。

時がたち、仕事も忙しくなるにつれ手料理を作る機会も段々減ってきたが、年に数回は家族にふるまう時がある。料理は作る時も楽しいが、食べてもらって美味しいと言われると、喜びもひとしおだ。

社長になって、趣味はと聞かれる機会も増え、仕事でやるゴルフ以外何もなかった私に、そうだ料理があったという思いが再燃。より時間が限られている中、手料理を再開している。昔は、美味しかったレストランのプロの味を思い出し、試行錯誤を繰り返しながら作っていたが、今はスマホを見れば、たいていの料理のレシピが掲載されており、作ろうと思えば何でもできる。本当に便利になったものだ。

最近では、シャリアピンステーキを何回か作ってみた。擦った玉ねぎに、肉を漬け込み、その酵素で、肉を柔らかくするのがポイント。家族にも概ね好評で、特にコロナ禍の中、ストレス解消になっている。料理を作る時、ちょっとした下ごしらえについてはレシピを見るより、妻に聞いた方が早くて的確。さすが主婦業のプロと感心するとこ



ろである。長い間、食事を始め主婦として家族を支えてくれた妻に感謝する時でもある。しかし、現在はダイバーシティも進み、女性が当たり前のよう働き、活躍する時代に入っており、当然男性が料理を始めとした家事を分担するようになっている。今後、コロナ禍もあり、男の手料理は、当たり前のよう浸透していくのではないかと思う。

社長業には、レシピもなければ残念ながら妻のような指南役もない。大変難しく試行錯誤の連続である。でもいつか、大和証券のお客様、株主を始めとしたステーキホルダーの皆さんに、何度でも味わいたいと思う“最高の料理”のような、クオリティNO.1のサービスを提供し、満足していただけるよう励んでいきたい。

最後にコロナ禍の中、ストレスが溜まる生活を強いられているが、早晚人類がコロナに打ち勝ち、また平和で希望に満ちた、活力のある日々を取り戻せることを心より祈念したい。